

教員の自己点検・評価シート(2024 年度春学期)の分析

2024年 12 月 9 日

教学マネジメント会議

教養教職機構

1. 全体的な傾向

①授業改善と自己点検

・各教員が授業内容や進め方、資料の見やすさ、能動的学習の導入などに取り組み、自己点検を通じてより良い講義を目指していることが確認できる。

②学生の興味関心と学習意欲の向上

・時事問題や身近な例、メディア資料の活用、学生同士や教員との対話を通じ、学生の興味関心を引き出す工夫がされていることが確認できる。

③知識定着と双方向のやり取り

・課題や練習問題、討議、ミニッツペーパーを用いた学習支援が行われ、学生が何を学んだかを重視する姿勢が見られる。さらに、学生への声かけやフィードバックを通じて教員と学生の双方向のやり取りを大切にしていることが確認できる。

2. 特筆されるべき事例等

・全ての科目において、学生の学修に対する動機づけを高める工夫がみられる。(身近な事例や学生が実感を伴うテーマの設定、写真や動画等の活用、パワーポイントの活用や ICT を活用した学びの提供、ミニッツペーパーの活用等)

・多くの科目において、「学力差」に対する様々な手立ての工夫や個に応じた丁寧な指導の提供がなされている。(学生の学びにくさに対して、課題の提出方法や板書等の工夫、課題提示の方法、個別指導の工夫等、教員の試行錯誤や工夫が確認できる。)

・英語教育において、学生のレディネスに応じたクラス分け、評価についての共通理解がはかれたことにより、4 技能 5 領域を意識した授業改善が図られ、学生の授業評価アンケートの満足度が向上した。

3. 改善事項の発掘

・学生の授業への取り組みに対し、教員側が様々な工夫・改善を試みる一方で、学生の受動的・消極的な授業態度や学びに対する目的意識・意欲についての温度差等の指摘が散見される。コロナ禍を経て、学生のコミュニケーション力等の課題を指摘する意見もあり、学生の現状やレディネスを把握しながら、引き続き、学生への学ぶ目的の明確化や学び方の創意工夫、意欲の喚起等について検討していく必要がある。

・学部混在型のアカデミックリテラシーにおける指導内容及び秋学期開講の基礎演習への連続性等について、本学の初年次教育についての再考・再検討が必要とする指摘がある。

4. アクションに向けての要検討事項等

・各科目における学生の学習意欲向上に向けた工夫・改善を引き続き検討すること。

- ・次年度から3学部混在で実施される予定の初年次教育について、到達目標及び実施の在り方等を再考・再検討すること。

経済学部

1. 全体的な傾向

- ・今学期についても、各教員による授業レベルの自己点検を通じて、講義の内容・進め方に加え、講義資料の判読性、知識定着に向けた能動的学習の導入・改善など、より良い講義の実現に向けた取り組みが行われていることが確認できた。
- ・前学期に引き続き、時事問題や身近な例の紹介、動画などのメディア資料の活用、学生同士・教員と学生との対話等を通じ、学生の興味関心を引き出そうとしている例が多くみられた。
- ・講義中での知識定着のため、課題・練習問題や、ミニツツペーパーへの記入、討議等を活用している記述も多くみられた。各教員が、「学生が何を身につけることができたか」を意識していることの表れと考える。

2. 特筆すべき事例等

- ・異なる教員による複数の科目間の内容に、連携を持たせようとする意識・取り組みが増加傾向にあった。科目間の連携を組織的に進めることが課題となっている中、教員レベルの工夫で改善を試みていることに関し、この場を借りて感謝申し上げたい。
- ・学内での研修を、さっそく学期中の講義に適用したとの記述があった。継続的な講義改善の取り組みに感謝するとともに、今後も授業改善に有用な研修の提供に努めたい。

3. 改善事項の発掘

- ・今学期も、学生側の受講姿勢に関する記述が多くみられた。興味関心を引き出すための教員側の様々な工夫にもかかわらず、学習意欲や受動的・消極的な授業態度などに改善が見られない学生が少なくないことに、とまどう声が少なくなかった。
- ・関連し、コロナ下を経たためか、ノート・メモを取る習慣が薄れているとの指摘も少なくなかった。スマートフォンなどにより映写資料を撮影するなどの行為が一般的になっているが、それが知識の定着につなげようとする意図をもって行っているのか、疑問視する記述もあった。
- ・具体的な内容、論理展開が明確な事項については一定の理解度が得られている反面、抽象的、多面的な考察が必要な事項などについて、理解が難しい学生が増えているとの意見があった。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・大学による授業アンケートの結果と、講義の場での感触との間に差異があり、結果の解釈に悩んでいるとの記述が複数あった。次年度から授業アンケートの実施方法(システム)の変更を検討しており、これによる改善が行われるかも注視したい。

データサイエンス学部

1. 全体的な傾向

- ・新学部1期生であり、初めて開講する科目ばかりなので、各教員が試行錯誤しながら講義の課題に取り組んでいることが確認できた。
- ・学生の既存知識にバラツキがあり、理解度が異なる学生に対して講義を行う上での工夫を行っていることが確認できた。

2. 特筆すべき事例等

- ・演習問題を多く取り入れて、学生の意欲を引き出す事例が見受けられた。
- ・既存知識が不足している学生に対して補講を行い、より丁寧な指導をしている事例が見受けられた。

3. 改善事項の発掘

- ・高等学校までの既習に関する記述があった。情報においては、共通テストで情報科目が必修になるなど、高等学校段階で学生がどのような授業を受けているのか、理解することが必要となる。また数学においては、高等学校側のカリキュラムの変更、学生によって学んでいる科目が異なる(数Iまで、数IIまで、数IIIまでなど)事に対応する必要がある。

4. アクションに向けての要検討事項等

- ・講義内で、演習系の授業を行う場合、学生の理解度の差が問題点となる場合がある。特に教員1名では対応が難しい場合があり、学生のTAなどを検討する必要がある。
- ・各学生が高等学校において、情報I・II、数学I・II・III・A・B・Cのどの科目を既習しているのか、事前に把握できるようになれば好ましいと考える。

国際交流センター

今年度春学期では、これまで課題とされてきた学習者の語学力のレベルの差や多様な学習ニーズへの対応について、多くの工夫がなされたことによる改善が確認された。例えば、LMSの機能を用いた反転学習の導入や、学生が興味を持って学習できるような教材選び、グループワークを含む学生同士の学び合いや活発な意見交換の場づくり、そして授業アシスト制度を活用し地域の人々との連携をとりながら行われた実践的・体験的な講義、などである。今後についても、学生個々の能力等に合った更なる授業改善策が提出された。